



TITLE:

京大広報 No. 255

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 255. 京大広報 1983, 255: 379-384

ISSUE DATE:

1983-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209431>

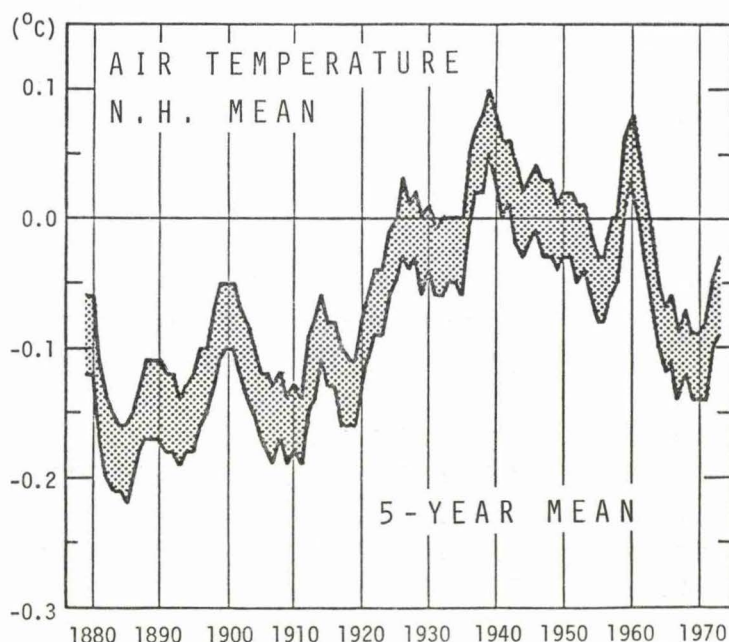
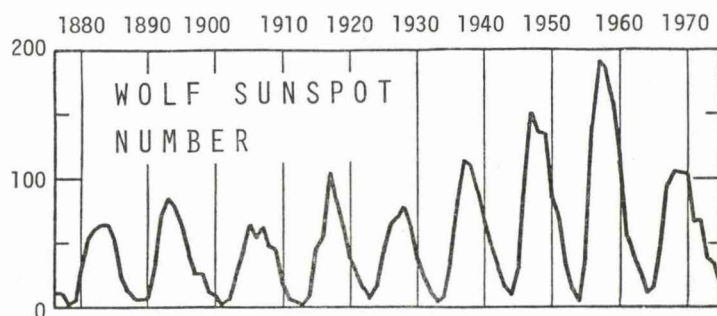
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 255

京都大学広報委員会



最近100年間の北半球平均気温（下）と太陽黒点数（上）

の推移—関連記事本文382ページ—

（両者の変化は、前半では、明らかな逆相関を示しているが、1920年代からその関係が崩れてきた。気候変動の複雑さを示す一例である。）

目次

- グアダラハラ大学との学術交流
—沢田総長，メキシコ合衆国
ほか3か国の大学を訪問—…… 380
- 5月18日の搜索をめぐる事態及び
5月21日の搜索・現場検証…… 380
- 木材研究所公開講演会…… 381
- 創立20周年を迎えた
数理解析研究所…… 381
- <紹介>
理学部・気候変動実験施設…… 382
- <随想>
昔のこと・今のこと
名誉教授 藤村吉之助…… 383
- 昭和58年度創立記念行事
音楽会及び学術講演会の開催… 384

＜大学の動き＞

グアダハラ大学との学術交流

— 沢田総長、メキシコ合衆国

ほか3か国の大学を訪問 —

沢田敏男総長は、メキシコ合衆国グアダハラ大学と学術交流に関する覚書交換及び同国ほか3か国の高等教育・研究機関の視察のため、5月7日に出発し、予定どおり5月22日帰国した。

グアダハラ大学との学術交流に関する覚書は、昭和55年10月21日、当時の同大学 Jorge Enrique Zambrano Villa 学長が来学し、本学との学術交流の申し出があり、その後、学内で検討が重ねられ、今回の訪問で交換されたもので、その内容は下記のとおりである。

また、沢田総長は、グアダハラ大学のほか、



グアダハラ大学において
覚書に調印する両大学長

メキシコ大学、ペルー共和国のサンマルコス大学、国立工科大学、ブラジル連邦共和国のパウリスタ総合大学、サンパウロ大学、アメリカ合衆国のハワイ大学等を訪れ、各訪問先においてそれぞれ関係者と意見交換等を行なった。

京都大学とグアダハラ大学との
学術交流に関する一般的覚書

京都大学総長とグアダハラ大学学長は、両大学の教育及び研究の協力と交流を推進するために、ここに学術交流に関する覚書を作成する。

1. 両大学は、双方の学術交流を拡大、推進するために、特に次の諸活動を行うことを奨励する。
 - (1) 学術資料、刊行物及び情報の交換
 - (2) 教員及び研究者の交流
 - (3) 学生の交流
 - (4) 共同研究及び研究集会の実施
2. 前項の諸活動の具体化については、両大学間で緊密に連絡し、協議して実施に当たる。
3. この覚書を変更又は解消する場合は、両者の協議によるものとする。
4. この覚書は、日本語及びスペイン語で作成され、両文書は等しく正文である。

昭和58年5月10日

京都大学総長

沢 田 敏 男

グアダハラ大学学長

エンリケ・ハビエル・

アルファロ・アングィアノ

5月18日の搜索をめぐる事態
及び5月21日の搜索・現場検証

5月18日（水）早朝、警察により吉田寮及び熊野寮に対し搜索が行なわれ、そのさい学生3名が逮捕された。

この日の搜索は、去る4月15日（金）午後、学生集団が事務局本館2階廊下及び総長室に乱入したことに對する建造物侵入被疑事件にかかわるもので、吉田寮1室及び熊野寮4室について、学生部委員、学生部職員が立会人となり、それぞれ午前7時すぎから同8時頃まで行なわれ、ヘルメット、ビラ類等が押収された。なお、搜索終了後学生3名が令状により逮捕された。

その後、同日正午すぎ、約90名の学生集団が本部時計台前広場でこの日の搜索・逮捕に抗議する

集会を開き、同集会終了後学生部庁舎まで示威行進し午後1時頃庁舎内へ進入しようとしたので、職員がこれを制止したが、学生集団はこれらの制止を振り切り庁舎内に入り、さらには学生部長名による口頭及び文書による退去命令を無視し2階廊下まで進入したので、午後1時5分、警察の出動が要請された。

学生集団は、到着した警官隊と学生部庁舎内で対峙する形となったが、午後1時25分頃庁舎外へ退去し、また警官隊も同1時30分頃本部構内から引き上げた。この間に学生3名が建造物侵入及び公務執行妨害の容疑で逮捕された。

さらに、5月21日（土）午前7時すぎから、4月15日及び5月18日の事態にかかわる建造物侵入等被疑事件について、警察による学内搜索及び現場検証が、関係部局長等の立会の上行なわれ、へ

ルメット、ビラ類等が押収された。

搜索は文学部学友会ボックス等4か所について行なわれ、午前8時15分頃に終了した。また現場検証は事務局本館等3か所について行なわれ、同9時10分頃に終了した。

＜部局の動き＞

木材研究所公開講演会

木材研究所では、5月13日（金）午後1時30分から5時まで、大阪科学技術センターにおいて、第38回公開講演会を開催した。講演題目と講師は次のとおりであった。

爆砕法による森林バイオマス資

源の変換と総合利用

棚橋 光彦

セルロース資源の有効利用

前川 英一

アテ材の生因を探る一特に針葉

樹の圧縮アテ材について

島地 謙

（木材研究所）

創立20周年を迎えた

数理解析研究所

数理解析研究所は、本年4月1日をもって創立20周年を迎え、5月23日午前11時から京大会館において、沢田敏男総長、飯田益雄文部省学術国際局主任学術調査官をはじめ、学内外から多数の来賓の出席のもとに、記念式典を挙行了。

本研究所は、数理解析に関する総合的研究という新しい目標のもとに、全国共同利用研究所として、昭和38年4月京都大学に附置されたものである。それ以来20年間にわたり次第に拡充され、現

在、11研究部門と1研究施設からなっているが、学問分野の進展に即応して、さらに大きく発展することを願っている。

本研究所は数理科学における、先端分野の開拓、新分野の創立など、数理解析の基礎及び応用の研究に多大の成果を挙げ、所員にあたえられた各種学術賞も7件を数え、また、数理解析に関連する重要な研究成果を発表する欧文誌 *Publication of the Research Institute of Mathematical Science* を1965年以来刊行しており、国内外の学界で高く評価されている。

数理科学に関する全国共同利用研究所としては、本研究所が我が国唯一のものであり、年間延べ参加者数が2～3千人に達する各種の共同研究を推進して、我が国の数理科学振興に貢献している。数理解析研究所の名称は、広く海外にも知られており、第一線で活躍する外国人研究者が世界各国から多数来訪しており、これら外国人研究者の滞在や国際研究集会・共同利用研究集会への参加によって、本研究所は数理科学における国際交流の中心としての役割を果たしている。

なお、同日午後3時から記念講演会を、また5月24日、25日の両日には記念シンポジウムを開催し、多数の聴講者があった。講演題目及び講師は次のとおりである。

記念講演会

5月23日

偏微分方程式における線型および非線型問題

Peter D. Lax (米国 New York 大学)

非単調推論の型式化

John McCarthy (米国 Stanford 大学)

記念シンポジウム

5月24日

多変数の値分布論

W. Stoll (米国 Notre Dame 大学)

多次元モーメント問題の作用素論的方法

B. Fuglede (デンマーク Copenhagen 大学)

特異摂動と数値解析

P. C. Fife (米国 Arizona 大学)

リー群の著しい有限部分群について

B. Kostant (米国 Massachusetts 工科大学)



5月25日

空間代数曲線と射弦空間上のベクトル束

R. Hartshorne (米国 California 大学)

Berkeley 校)

多様体上の層の超局所解析

柏原正樹

(数理解析研究所)

<紹 介>

理学部・気候変動実験施設

大気中の二酸化炭素の濃度は、19世紀末では約290 ppmであったが、最近では340 ppmに達した。今後も引き続いて増加し、21世紀には600 ppmを越えるものと予想されている。このような二酸化炭素の増加によって、地球の気候は著しく温暖化するのではないかと懸念されている。地球の気候は、太陽放射として流入する熱量が、地球から赤外放射として宇宙空間へ放出されている熱量と釣り合う状態で、成り立っている。二酸化炭素は赤外領域に顕著な吸収帯をもっていて、その増加は宇宙空間への熱放出を抑制するので、地球の気候の温暖化が懸念されるのである。

昨年3月に起ったメキシコのエル・チチョン火山のような大噴火は、地球の気候を寒冷化するのではないかと懸念もある。大噴火によって、高さ15 km以上の成層圏へ噴き上げられた物質が、風に流されながら拡散して地球全体をおおくと、地表面へ流入する太陽放射を部分的に反射し、地球大気の熱の取得を減らすので、寒冷化が懸念されるのである。

このような懸念がもしも実現するならば、人類の生存にかかわる重大事である。それ故、仮りに実現するとしても、それがどの程度であるかを明らかにすることは、極めて重要な課題である。この解答を得るためには、気候変動のメカニズムの解明が先決であり、多くの未解決の問題が残されている。地球の気候は、海洋などの水圏や生物圏と互に影響を及ぼしながら、大気圏の大小さまざまな現象が非線型的に相互作用をして、成り立っている。それ故、太陽活動や火山噴火など外的要因が変化しなくても、地球の気候は、絶えず変化している。

このような地球の気候変動を、観測データの解析と数値実験によって研究するために、昭和56年4月に、本学部に気候変動実験施設が新設された。この新設に際して、地球物理学教室附属の気

象学特別研究所の建物などが利用された。気象学特別研究所は、大正15年に府立植物園構内北西隅に設立され、昭和55年に花山天文台敷地内に移転して、本学部附属気候変動実験施設に変わった。

当実験施設では、専用の中型電子計算機システムが昭和57年1月に導入され、全世界の気象観測データの解析と気候の数値モデルの開発に利用されている。最近の観測データの多くは磁気テープ化されていて電算機処理が容易であるが、古いデータは印刷物としてしか残されていない。それ故、当実験施設では、大きさ1耗程度の活字の印刷データを直接磁気テープ化する光学文字認識装置(OCR)を独自に開発して、世界の気象・気候データを磁気テープ化しつつある。

また、グローバル特別気象観測計画の観測データを保有して、全国の大学研究者の利用に供している。この観測計画は、1978年から1979年にかけて、全世界の国々の莫大な人的・物的寄与の下に実施された高精度・高密度の国際協同観測であって、1年間の観測データが2,400フィートの磁気テープ約400巻という膨大な量である。このように充実した観測は未曾有のものであって、その利用によりグローバル気候の変動のメカニズムについて多くの成果が期待されている。当施設では、観測網の疎らな熱帯地方の解析手法を独自に開発したので、それを用いて気候変動のメカニズムを研究している。

グローバル大気の流れを電算機上で再現して、二酸化炭素の増加などの外的要因の変化による気候変動を研究するために、当実験施設では大気大循環の数値モデルを開発している。米国その他の国で作られている既存の数値モデルが時間積分によって気候変化を再現しようとしているのに対して、季節変化など時間的周期性を求めるという点で、当実験施設のモデルの特徴である。これにより、気候の予測可能性や気候の敏感度など、気候変動の重要課題に、新しくメスを入れ得るものと期待される。

(理学部)

昭和58年度創立記念行事 音楽会及び学術講演会の開催

本学では、6月18日の創立記念日を祝し、下記の音楽会及び学術講演会を開催いたします。
本学教職員、学生の来聴を歓迎します。

音 楽 会

日 時 昭和58年6月17日（金）午後6時開演
場 所 京都府立勤労会館

京都市中京区烏丸丸太町下ル
（市バス、地下鉄 烏丸丸太町下車）

演奏者 宗 倫 匡（バイオリン）
宗 施月子（ピアノ）

演奏曲目

シューベルト ソナチネ No. 3 ト短調
op. 137-3
シューベルト 幻想曲 ハ長調 op. 159
J. S. バッハ シャコンヌ（バイオリンソ
ロ）
ショパン バラード No. 3 op. 47
（ピアノソロ）
ドビッシェ 子供の領分から（ピアノソ
ロ）
ショパン（ミルシュタイン編）
ノクターン 嬰ハ短調 遺作
クロール バンジョーとフィードゥル

入場無料

備考 1) 職員証または学生証を持参してください。
2) 定員1,300名先着順とします。

演奏者略歴 宗 倫 匡

1943年東京生まれ。1963年ジュネーブ国際音楽コンクール第2位入賞（1位空席）、1964年パリコンセルバトアール第1位卒業。1967年ロン・ティボー国際音楽コンクール入賞など輝かしいキャリアをもち、1968年からヨゼフ・シゲティの助手として亡くなるまで協力するかたわら、スイス、ドイツ、イタリア、イギリス、アメリカなどでリサイタル、放送等で活躍。現在ロンドンに居を構え世界各地で多方面な演奏活動を行なっている。またしばしば日本へも帰国し、小林道夫氏との協演や各オーケストラの定期演奏会等に出演し高い評価を得ている。

演奏者略歴 宗 施月子

東京出身。1950年毎日新聞社・NHK共催第4回全国学生音楽コンクール高校の部第1位入賞。東京芸術大学音楽学部ピアノ科及び専攻科卒業。在学中NHKシンフォニーホールにてNHK交響楽団と協演してデビュー。以来、東京でリサイタル開催のほか全国各地で演奏活動が続ける。現在、フェリス学院短期大学音楽科勤務。

学 術 講 演 会

日 時 昭和58年7月5日（火）午後3時30分
から

場 所 京大会館101号室

講 師 村山 朔郎（本学名誉教授）

演 題 土の力学的挙動
一特に物性論的にみて一

講師略歴 村 山 朔 郎

1935年京都帝国大学工学部土木工学科卒業。鉄道省勤務を経て1945年京都大学工学部助教授、1948年教授。1959年防災研究所教授。1971年～1973年防災研究所長。1975年退官。この間、1969年第7回国際土質力学会議基礎工学日本代表委員、国際岩石力学会議副議長、1970年OEC D主催地下工学に関する国際会議日本主席代表を務め、同年土質学会賞、1971年紫綬褒章受章。工学博士。

（学生部）